

偉業

佐藤 宗 丕



マーシャル方面遺族会 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会) 郵便番号 154 世田谷区野沢3-11-3 電話 東京 (421) 3614 振替口座東京 93487 編集兼発行人 浮田信家

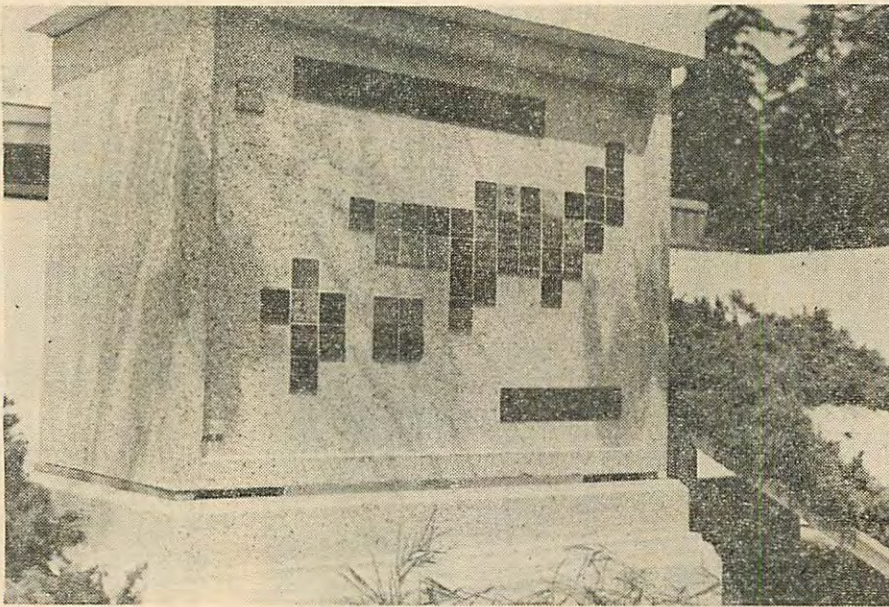
姉木保ミサオは生来余り健康な方ではないが、毎年二月六日には靖国神社に参詣し神楽を奉納することを欠かさなかった。亡夫木保定治之命の御霊と対面しお話する為である。毎年同じ日、同じ時刻に参詣する者同志は何時しか顔馴染みになり、同じクエゼリン島玉砕の遺族とわかり家族のことなども話し合うようになった。その中の一人山浦さんは「母はク国雄はキツと何処かに生きている。家がわからなくなって探しているに違いない」と云って「戦死したのヨク」と言い聞かせても信じていないと云う。そして「一年毎に足が不自由になって今年はやつと来たけど来年は来られるかしら」と。又「クエゼリン島を地図で見ると随分遠く小さな島ですがどんな所でしょううか」

私は考えた。全国には山浦さんのお母さんのような方がどの位居るだらうか。何とかしてあげなければと。あれから七年。今年も亦やがて二月六日がやってくる。三十八年二月、第一回の遺族集會をもつてから遺族会設立、二十年祭執行、戦没者名簿並遺族名簿の発行、戦記刊行、会報発行、現地慰霊調査遺骨遺品の収集、現地慰霊碑建設等々、本會は短い期間に驚く程多くの事業を成し遂げた。遺族だけの善意と協力でこれ程の大きな事業をやったのは他に例を聞かない。正に偉業である。

南方に旅した人々が必ず語るのには「南方の国々ではク日本に学ぼう、日本に統こう、独立出来たのは日本のおかげ」と言っていることである。

敗戦の焼け跡の中から近々二十年の間に戦前にまさる復興した国土、世界第三位と迄伸びた生産量、戦勝国よりも安定した経済力、戦火を蒙った国の人達さえ感謝し尊敬する我が日本の今

(13頁につづく)



マーシャル諸島ギルバート諸島 戦没者忠魂慰霊碑

昭和四十三年八月十七日 迎賓館にて除幕・清祓式当日

目次

偉業.....佐藤 宗丕(1)
クエゼリン環礁警備日誌(6)
有馬 成甫(2)
私は亡き先輩諸氏と共に
あります.....井上 義夫(3)
ウォッセ島を弔う.....浮田 信家(4)
副会長加藤普佐次郎先生
の御逝去を悼む.....(7)
忠魂慰霊碑除幕・清祓式に参列
して.....岡野 正文(7)
現地における慰霊碑建設工程
報告 クエゼリン.....徳原 徳子(7)
忠魂慰霊碑に使用した都道府県
の銘石.....(7)
マキン島.....佐竹 エス(8)
尾崎キエ様からの便り.....(9)
マキン島戦史.....(10)
宮崎正統様からの便り.....(10)
タラワ戦二十五周年記念祭典へ
の招待.....(11)
徳原徳子さんのことども.....(11)
昭和四十四年二月六日の慰霊祭
の御案内.....(12)
昭和四十三年靖国神社秋季例大
祭に参列して.....(12)
地方での現地報告会.....(12)
第二五二航空隊員がウォッセ島
で戦死の例.....酒匂 辰生(12)
歌 壇.....(13)
会計中間報告.....(13)
寄附者芳名.....(14)
事務局だより.....(14)

クエゼリン環礁警備日誌 (6)

文学博士 有馬成甫 (元海軍少将)

昭和十八年

七月十五日(木)晴 宇治丸ヤルトより入港す。直にビケージに至り捕獲網を陸揚す。

タロア島より桂丸入港す。米俘虜二名載せ来る。前述の通り四十六日間も漂流したる故、相当衰弱あり、軍医長に先づ以て健康を恢復する様取扱を命ず。俘虜取扱について昨日主計長に諮問したるに對し、戦時国際法(ジュネーブ条約)により左の通り取扱うこととす。

(一)禁錮室に入れる
(二)食事は兵員と同様なものを給す。
(三)午前、午後各約一時間室より出して体操等をなさしむ。
(四)軍医一名を附し、健康状態を注意せしむ。

七月十六日(金)晴 昨夜八時第一福神丸ボカク島の南西地点(北緯一三度五十六分・東經一六八度十六分)にて浮上中の敵潜水艦を発見し砲撃を加へたりとの報告あり。

七月十七日(土)晴 ルオット島に来年二月迄の糧食を送る。午後五時十五分ボカク見張所潜水艦より砲撃を受く。

七月十八日(日)曇 大艇にてボカク見張所を換せしも異状なし。但し見張所部署改正の必要を認めれば直に起草し翌日出来る。

七月十九日(月)雨 先日出港して大島島に向いつつありし第二〇御影丸雷撃を受け沈没せりとの報告あり。

七月二十一日(水)晴 佐藤波藏少将来島北条氏長を語る。

七月二十二日(木)曇 機雷学校長佐藤波藏少将の機雷投射盤の説明講話を聴く。

各砲台長、指揮官補佐、士官室員を集合砲術学校教官小倉大佐の談を聞かしむ。

七月二十四日(土)晴 收容捕虜の健康状態恢復したるにつき訊問を始め(訊問者は第四艦隊より派遣の通訳による)。

七月二十五日(日)晴 午前八時四十分大島島にB24機五来襲す。高度六〇〇〇米、損害なし。

七月二十六日(月)曇 午後総員集合、去る十五日夜敵潜水艦を発見、砲撃々沈したる第一福神丸船長以下乗員を表彰す。

七月二十七日(火)晴 午前八時三十分大島島にB24八機来襲す。

七月二十八日(水)晴 午後四時タラワ島に米大型機十六機来襲築城工事に就ての参考事項

内地産の土砂と異り、珊瑚礁を用いて作りたるコンクリートの強度は多少弱き傾向あるも年月を経れば強度を増すと云。然し実証を経ざれば約80%の強度としてその厚さを算出し作業することに決す

七月二十九日(木)晴 豚の子十三匹生る。九二式小銃(口径七、七ミリ)を見る。七月三十日(金)晴 エニエラツ見張所を巡視す。七月三十一日(土)晴 陸戦隊第一小隊機銃小队を兵舎より南地区へ進出せしめ防禦線に近く野営す。

八月一日(日)晴 ビルマ独立宣言を聞く。

八月二日(月)晴 第四建築部にて郷軍組織となし時々訓練を行ふこととす。

八月五日(木) 軍需部八十名も郷軍組織とし之に加はる。

八月八日(日)晴 午前六時三十分四建郷軍隊(一ヶ中隊)及軍需部郷軍隊(二ヶ中隊)の訓練開始式を挙行す。各教練及陸戦隊第三小队先導してクエゼリン神社迄行軍。社前にて着剣捧銃五ヶ奉唱の後開兵。午前九時解散。下士官兵集会所竣工。保管に任ず。

八月九日(月)曇 福神丸(工作船)にて完成せる山内砲架を見る。公試終了。工作力の増大喜ぶべし。

八月十日(火)雨 涼し26度電波物理研究所(東京北多摩郡小平)研究官来訪。近き内に電波測定を初むる由

八月十一日(水)曇 午後第八号及び第二十一号駆潜特務艇船団を護衛して来着。第六十一警備隊に附属せしめらる。両艇長伺候に来る。

午後兩艇を巡視す。排水量一三〇トン速力十一ノット。船体木造。主機ディーゼル。探信儀。吊下式聴音器。

爆雷十八個。この近海の駆潜作業には充分に役立つものと認む

八月十三日(金)晴 陸戦隊本部新兵舎を見る。水没となりし九九式小銃、重機銃弾薬包十六万発を手入す。

八月十四日(土)晴 下士官兵集会所本日より開設。防備強化班(機雷学校長一行)来訪。

八月十五日(日)晴 砲術学校教官佐藤少佐の陣地に於ける指導教練を見る。

八月十六日(日)晴 大艇にてルオット島に行き砲台を巡視す。第二航空隊司令官の招待にて昼食に列す。飛行機にて午後一時発、午後一時三十分クエゼリン本島着。

八月十八日(水)曇又晴 午前六時十二サンチ砲台に於ける教練射撃(砲術学校教官小倉大佐指導)終つて研究会及講評

八月十九日(木)晴 司令部にて指導班各科教官の研究会講評等あり。皆背紫に當る。現出の実現に努力せんとす。

八月二十日(金)晴 機雷学校長一行出発。ブラウン島防備強化の為十二サンチ砲二門十三ミリ連装機銃二基兵力一ヶ中隊増強の旨第四艦隊参謀より通知あり。

八月二十一日(土)晴 第二回郷軍軍事教練実施。

八月二十二日(日)晴 キスカ守備隊無事撤退の旨大本營より発表あり。指揮官木村昌福少将、余が教官のとき普通科学生(砲術学校)なりし人。

八月二十三日(月)晴 陣地の教練を見る。基地隊を巡視す。中央より九月五日付山形大佐第六根拠地隊司令部付発令の予報来る。

八月二十五日(水)晴 米人捕虜二人、命により好便にて大船收容所に送る。

昨夜棧橋にて大魚(アラカブ)長さ8尺、胴の廻り6尺以上を釣り上げ。

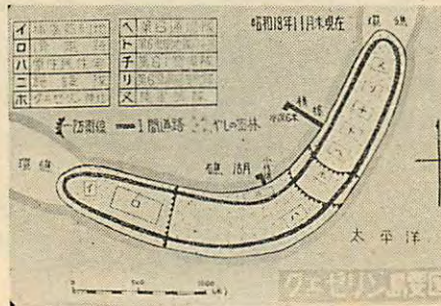
八月二十六日(木)曇 〇一二二歩兵聯隊第四艦隊配属となり聯隊本部はクエゼリン島にミレ島には一ヶ中隊、マロエラツ及びウオツに各一ヶ大隊を附属せしめらるる旨発令。

八月二十八日(土)曇 第二回機銃教練射撃を見る。

八月三十日(月)晴 午前七時旗艦(小林第四艦隊司令長官坐乗)入港。

阿部第六根拠地隊司令官と共に伺候す。参謀長は旧知の鍋島俊策少将にて色々情報聞く。

八月三十一日(火)晴 午前七時長官巡視。司令部にて准士官以



あり。皆背紫に當る。現出の実現に努力せんとす。八月二十日(金)晴 機雷学校長一行出発。ブラウン島防備強化の為十二サンチ砲二門十三ミリ連装機銃二基兵力一ヶ中隊増強の旨第四艦隊参謀より通知あり。八月二十一日(土)晴 第二回郷軍軍事教練実施。八月二十二日(日)晴 キスカ守備隊無事撤退の旨大本營より発表あり。指揮官木村昌福少将、余が教官のとき普通科学生(砲術学校)なりし人。八月二十三日(月)晴 陣地の教練を見る。基地隊を巡視す。中央より九月五日付山形大佐第六根拠地隊司令部付発令の予報来る。八月二十五日(水)晴 米人捕虜二人、命により好便にて大船收容所に送る。昨夜棧橋にて大魚(アラカブ)長さ8尺、胴の廻り6尺以上を釣り上げ。八月二十六日(木)曇 〇一二二歩兵聯隊第四艦隊配属となり聯隊本部はクエゼリン島にミレ島には一ヶ中隊、マロエラツ及びウオツに各一ヶ大隊を附属せしめらるる旨発令。八月二十八日(土)曇 第二回機銃教練射撃を見る。八月三十日(月)晴 午前七時旗艦(小林第四艦隊司令長官坐乗)入港。阿部第六根拠地隊司令官と共に伺候す。参謀長は旧知の鍋島俊策少将にて色々情報聞く。八月三十一日(火)晴 午前七時長官巡視。司令部にて准士官以

上伺候終つて各隊、陣地、砲台等
巡視。午前九時終了。
九月一日(水)晴 陣地にて陸
戦隊の訓練を見る。

九月二日(木)晴 早曉第四艦
隊司令長官陣地に於ける訓練巡視
を終て明日ロット島巡視予定につ
ぎロット島に泊す。然るに明日
の長官巡視取止めの報あり。

九月三日(金)晴 本隊に帰
る。砲台、陣地の教練を見る。

九月五日(日)晴 本日付にて
予の後任予定者山形大佐第六根拠
地隊司令部に補せられたる旨発
表。

九月七日(火)晴 軍艦那珂、
五十鈴及び運送船日枝丸・千早丸
入港す。○一二二聯隊本部及び兵
六六〇人聯隊旗を先登として日枝
丸より上陸クエゼリン方面に常駐
の筈、準備せる宿舎(第六潜水隊
基地用)に入る。

九月八日(水)曇又雨 砲台教
練射撃の予定なりしが、天候悪し
く標的を曳く飛行機飛ばず。射撃
を中止し教練演習を行ふ。
軍艦那珂に司令官伊藤賢三少將
を訪問し大に歓談す。

九月九日(木)曇 雲ありしも
午前七時頃より曳的飛行機及び白
雲の断間に標的を見得るに付教練
射撃を始め、午前九時終了。

○一二二聯隊長陸軍大佐大石千
里氏(松山聯隊)日枝丸船長原田
文一氏来訪。

九月十日(金)雨又曇 昨日伊
太利パドリオ内閣無条件降伏せり
との報あり。

午後教練射撃研究会を開催す。
九月十一日(土)晴 十三ミリ
機銃五挺受領。築城作業の弾薬庫

工事を見る。正午千早丸、知床、
富士川丸船団トラック島へ向け発
九月十二日(日)晴 午前二時
四十分昨日出港の船団雷撃を受
く。知床、富士川丸航行不能との
電あり、次で千早丸は富士川丸を
保護し迂回航路を経ミレーより入
港せんとすとの電ありしにつつき水
路嚮導のため兵曹長を派遣す。

九月十三日(月)晴 午後大艇
便にて山形大佐着任、夜副長と三
人月明を賞して食事を共にす。
今夜爆撃行あり。壮途を祝し遙
かに見送る。

エニエラップカン工事(兵力に
て築城工事)を始む。
九月十四日(火)晴 山形大佐
へ申継(本日付余は横鎮附発令)
第四艦隊司令長官クエゼリンに帰
着の筈なりしも昨夜第二十二航空
隊「フナクチ」を爆撃しその報復
爆撃警戒の爲めその儘ロット島
に止まられし由。

聯隊長及將校を案内し陣地を見
る。
九月十五日(水) 午前新司
令山形大佐の着任式。次で隊内点
検午後予の退隊式あり。潜水艦基
地隊司令部に移る。

九月十六日(木)晴 クエゼリ
ン神社に参拝し次で各部に挨拶に
廻る。

九月十八日(土)曇 午前二時
三十分起床。三時三十分大艇に乗
る。四時五十分出発離水。途中ポ
ナベ島に寄り午後〇時十三分トラ
ック島着。

本日を以てクエゼリン警備の任
を解かる。

辞任発久世林一

四ヶ月衛戍些効し忠 絶洋孤島漸難攻
久世林礁影既濼 爆音一声登雲頂

私は亡きクエゼリン島の
先輩諸氏と共にあります

井 上 義 夫

(終)

親愛なる戦友の諸兄は、日本の
安泰と民族の発展を願つて遙か南
海の孤島クエゼリンを死守され、
昭和十九年二月六日遂に全員玉碎
されました。あれから二十四年の
歳月が経ちました。御安心下さい
諸兄の故国日本は昔に増して平和
と繁栄が続いております。

しかし今日のこの夢にも思わな
かつた繁栄は自然に生れ出たもの
ではありません。これは身を安ん
じて国に捧げた諸兄の功績に他な
りません。即ちこれは諸兄の残し
た大なる遺産なのです。

大東亜戦争のもつ意義は別とし
てひとたび祖国の危機とみるや何
の意図もなく唯々一途な真心をも
つて敢然としてこれに当り、なし
得る限りの力をふり絞つて戦い果
てられました。戦争終結の形がど
うであろうとも諸兄の死は決してム
ダではなかったのです。少しも臆
することはありません。先日のテレ
ビ放送でもそれがはっきり出さ
れました。

どうか御安心下さい。英霊とし
て一億全国民があがめ祀つており
ます。どうか安らかに眠つて下さ
い。そして故国日本が永久に平和
でありますようしつかりお守り下

さい。
六十一警備隊の主計科・上等主
計兵曹久村正さん、二人で二十六
年前を思い出しましょう。私が先
にクエゼリンに進出していてあな
たのおいでを待っていました。ど
んなやかましい先輩がくるんだら
うかと実のところ気がしていたの
でしたが、案に違つてメガネをか
けた柔和な男前の主計兵曹、ほつ
としました。

若い私に庶務の仕事をよく教え
て呉れました。毎日毎日が実戦、
最前線基地で昼に晩に夜中に張り
切つて精一パイやりました。
全てを共にしたのに私は病のた
め無念内地に還されることになり
ましたが、又何処かで元気な顔で
お会いしましょうと別れたのでし
た。

しかし久村さんとは遂に再会は
なりません。そして私は最
後まで生き残つて故郷に帰つて来
ました。

私は今海軍を引離いだ海上自衛
隊に勤務し充実した毎日と、曲り
なりにも幸せな家庭生活をもつて
おります。生き還つて今日を享有
している私、何でクエゼリン島を
忘れましょう。以来ずっと心にと

めております。思い募つて昭和四
十三年二月六日の命日に自衛隊新
聞「朝雲」に先輩諸兄と共にした
鳥の様子を記事にしました。いく
ばくでも諸兄の霊に伝えることが
でき、私の心の隅にあるものが軽
くなればと思つたからです。読ん
で頂いた各地の人々が共鳴してく
れ、関係ある人々が思いを同じく
してくれました。遺族の方々も喜
んで下さつたようです。満足に思
つております。私生きています。限
り諸兄の偉功をたたえ諸兄の霊にお
参りをつづけ諸兄とともにありま
す。

(現在海上自衛隊佐世保)

予 告

本誌三号以来連載した有馬成甫
先生のクエゼリン環礁警備日誌は
昭和十八年五月即ち敵海空部隊が
攻勢に転じギルバートに近づく直
前迄の我方の準備息づまる気もち
で読ませていただきました。その
後有馬先生の前任者として第六十
一警備隊司令の職に在った成田喜
代治海軍大佐がその任期昭和十七
年十月十五日即ちガダルカナル作
戦に利あらず我軍が転進のやむ
なきに至つた頃から昭和十八年五
月まで、ややもすれば衰えんとす
る士気を維持否鼓舞するたためつく
された貴重な陣中日誌の御寄稿が
ありましたのでこれを次号から連
載いたします。娯楽機関の全くな
い、内地からの音信はもとより食
糧、弾薬の補給さえ途絶え勝の最
前線の陣中生活を偲ぶよすがとし
て御期待下さい。(編者記)

ウオッセ島を弔う

現地派遣員 浮田信家

昭和四十二年

八月二十六日(土) 午後十

一時我々の乗船ラリックラタック号はメジチ島泊地を出港した。マシー諸島は大部分が環礁であるのに、この島は単島。従って危険な水道のリーフ(珊瑚礁)を通過の必要もなく、深夜の出港容易であった。

船首を南西に向け、八十六連先のウオッセ島に急いだ。戦争中の出来事は当時第六十四警備隊の吉見司令や第八〇二海軍航空隊で従軍した千葉秀夫氏から詳しい話を聞いてある。又この島の公学校長であった、現在札幌の三角先生からは會長トメイン氏や公学校の先生方への紹介状も頂いてある。米国のウイリアムス氏の記憶資料は土屋篤志会員から受けており、戦史・海図や水路誌は我々に詳細な事情を教えている。内地出発前既に充分の調査をした島である。その島に明朝着く。

海拔僅か一・五米・島の長さは五千米で、最大の幅二千米という小さな島に島民の外我海陸軍人軍属が三千五百余名も進駐して守備に当たったので敵艦船、飛行機との交戦の外栄養失調によって計二千余名もの勇士が、戦歿したという悲しい戦史を残した島である。

このウオッセを、この目で見て、遺骨あらばこの手でそれを故国にお迎えするのだなど考えると目が

さえるばかりで眠れない。又船内温度は三十六度、コブラ酸酔の臭気が充ちているとあって眠れず、板橋の上まで上ってデッキに寝たのにも慣れたので、しばらく南十字星や流れ星を見るうちにぐっすり眠りについてしまった。

八月二十七日(日) 午前四

時半ウオッセ環礁が見出した。マシーナル・ギルバードの環礁を船からスケッチすると、どれも横一本線をひいた上に、緑色で長短適宜の線を画き添えた絵になる。ウオッセもそんな島である。これは何となく慣れた船長でないとわからない。本船は環礁中南東部のトートン水道から礁湖に入りウオッセ本島に向った。

マジュロ出港後十六日過ぎただけなのに冷蔵庫が小さいため生糧品が無くなり今朝はうすい紅茶に堅い乾パンだけになってしまった。

外の船客や乗組員は、椰子・タコ・パンの果実、釣りあげた魚の丸かじりで案外平気であるが、我々はこんな生活が続くと栄養失調に陥ると保健の先生、佐竹さんが案じ始めた。七時ウオッセ本島に投錨した。

ウオッセを目前に眺め乍ら、在泊中の積込作業や出港の日がきまらないうので上陸ができない。糧食・清水の欠乏・昨日メジチで起き

たデリック(荷揚機械)の損傷、そのときワイヤーにはねられた重傷患者、一昨夜潮流のため流失した上陸用ボートの補充といった緊急事態を解決するため一旦マジュロに帰る必要があることを本社に連絡するが週末休日のため、本社の返事が得られず、船長は調子の悪い短波を無器用な手つきでつづき乍らあせるがなかなか埒があかない。我々は見ているにいらぬすが、南洋の人は羨しいほど泰然自若であり、これを仕方なしとあきらめている。

その間も島からは小さなボートが盛んに往来して、下船客が降りたり、マジュロ行の船客が降りこんだりした。内地出発前三角先生から紹介状をいだいた先生ピリモンさんとカンバさんが船にきた。予め承知して来たのではな

い。ピリモンさんはマジュロ行の船客として、カンバさんは船長に

用事があったのである。我々は二人の名前は知っているが顔は知らない。このためカナメ、ヤマムラさん(ただ親切の気持だけで自発的に我々を案内するため休暇をとって、船賃も自弁でマジュロから、ずつついて来たかウオッセでいった夫婦)に頼んであったのでピリモン、カンバ二人が船に来たことはすぐ知らされた。我々がこんな人達に会えたのは英霊の導きによるとしか考へられなかつた。

すぐにも一緒に上陸し、戦跡を探ねたかったが、上陸を許さないので、船上で海図や当時の配備図を展げて島と見くらべ詳細の話を聞いた。聞き乍らも上陸がたくてならなかつたが、島を見ながらゆつくり話を聞いた方がより良かったと後になって悟った。

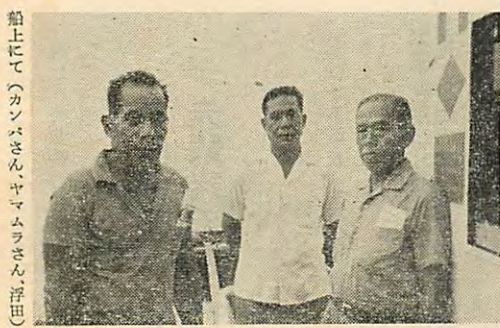
昼過ぎ本社の指令があり、直ちにエビゼに帰り、患者を入院させることとなり午後三時出港と決つた。エビゼで患者を降し直ぐウオッセに引返すなら我々は島に上つて待ちたかつたが、予定が全く定まらなかつたため船と行動を共にせざるを得なかつた。しかしピリモンさんとエビゼ島まで同船ということになり更に多くの話が聞けたことは幸せであつた。

八月二十八日(月)

午前七

時エビゼ島に投錨。ハワイ標準時を使うエビゼは今日はまだ二十八日であり日曜である。患者をおろし若干の糧食(日曜のため充分の塔載はできなかった)等塔載して午後三時出港した。ウオッセ島に

戻らぬものと思つて、我がが、予定が変り、リキエツプ環礁に向い北



船上にて(カンバさん、ヤマムラさん、浮田)

上することとなつた。
八月二十九日(火) 午前二
時リキエツプ環礁入口に仮泊。夜明を待つて環礁内に入りリキエツプ本島に投錨した。

コブラの塔載について終日本社との交信があつたらしいが結局夕方になって塔載しないことに決つた。夜間水道を抜けることは危険のため水道出口まで来て投錨した。そろそろ我々の焦慮が始まつた。
八月三十日(月) 夜明を待つて投錨。水道を航過しウオッセ島に向う。ホツとする。

リキエツプから八十四連、午後一時にウオッセ環礁中ニープング島に投錨。コブラ塔載が始まつた。
戦争中の事情を聞くためと、一週間近く洗面も、入浴もシャワーすら浴びられなかつたので、早速上陸した。

戦死した者、栄養失調で亡くなつた者のことを想い、我儘は云はないと励まし合つたが、我々も呆れる垢・汗の臭気、たとえ飲水はなくとも顔を洗い、体の垢をおとし、運がよければ下着の洗濯位したく、磯波の危険を冒し、荒っぽい乗組員と共に陸に上つた。

この時の佐竹さんの勇氣には驚きもしたが敬意も表した。
陸上二時間。年寄連中に戦争中の想ひ出を聞く。口を揃え日本人の勇敢さと慈愛の深さをたたえていた。顔を洗えた。垢もおとせていた。下着の洗濯も出来た。午後四時帰船。コブラの塔載量多く作業は深夜までつづいた様子であつた。

八月三十一日(木)

昨夜の

予定では、ここを出港したらオリ
メージ島に寄る。我々はそこから
ボートで先行してウオッセ本島に
行くことにしてあった。この予定
もまた変更になりニープング島出
港後はオリメージ島とウオッセ本
島で乗降客の仕末のため二時間宛
碇泊して、直ちにマジユロに帰る
ことになったと船長が云う。

八月十二日から半月以上も乗船
しているのは一にも二にもウオッ
ゼ島に行きたいためであった。二
時間の碇泊で出港されては困る。
ハインネ官も社長も承知の筈であ
るからウオッセ本島碇泊を二十四
時間延長する交渉をするよう船長
に要請した。

船長の交渉する短波無線電話機
の側に座りこんだが、島民語でや
りとりするので雲行きがわからな
い。この接渉の四・五時間頭がす
っかり白髪になるのではないかと
案んずるほど心配した。指令通り
行動されたら、我々はウオッセ島
のため更に二・三カ月マジユロ滞
在を延さなくてはならないからで
ある。

ウオッセ本島に投錨の一時間前
即ち午後一時になってやっと要請
通り、二十四時間の碇泊時間延長
同意の回答に接した。長官、社長
の好意を深く感謝した。早速上陸
準備をする。墓標はじめ毎回やっ
たとおり十四個の荷物を上陸用ボ
ードに積みこんだ。カンバさんは
本船の投錨位置まで来て待ってい
た。投錨後十分も経たない中にヤ
ママ夫妻と共に本船を出た。
戦争中活発に使用されたと聞か
された突堤も埠頭も総て破壊され
今は使用するどころか危くてボー

トは近寄れない。
他の島同様ボートの船首を砂浜
に近づけ膝上までつかる海にとび
込み荷物をあげた。カンバさんも
ヤマムラさんも集まった島の人々
も手伝ったので、間もなく荷物は
ヤマムラさんの親戚の住居(図中
⑬)に運ばれた。

ウオッセ島は現在住民約三〇〇
人(昭和十六年現在四八三人)、
マジユル諸島ではヤルト環礁
のジャポール島と共に、マジユロ
島に次ぐ人口の多い島であるが、
現在は電気は勿論商店も病院もな
い。そんな島なのである。
船上から見たところ、全島椰子
に覆われ、その間にタコの木、パ
ンの木その他雑木が繁茂し、樹頂
上陸して見ると木々の間には蔓
の多い雑草が茂りさながらジャン
グル地帯である。

島民の一部は我軍の残した建物
何れもひどく壊れているが、その
まま住居としている。あとの人は
椰子の葉を葺き、周囲も椰子の葉
やタコの葉で作った簷で囲み、床
はあったりなかったりという極め
て原始的の生活である。大い
の家に厠もない、あったとしても住
居から離れたところに柱を四本立
て、周囲に簷を下げた程度であ
る。雨水をドラム缶に貯めたのが
飲用水である。

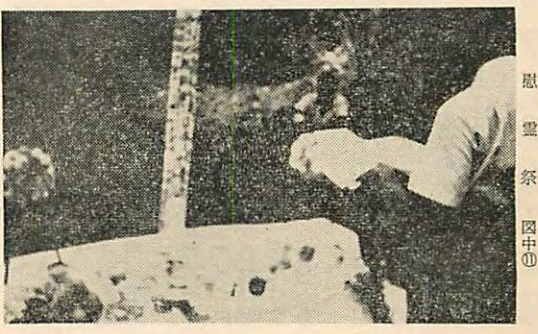
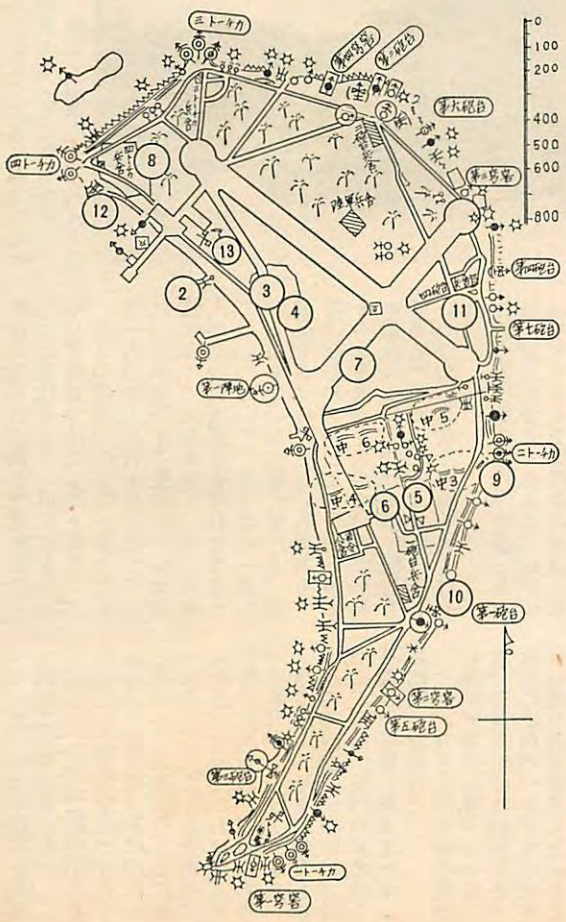
四日前カンバさんやピリモンさ
んから島を見ながら聞いた話、又
航海中ヤマムラさんから聞いたの
で早速図中⑩附近に行つて日本人
墓地をさがすことにした。防備
要図を見ると、滑走路を通つて第
四砲台の方に行けば、直ぐ判る筈

である。ところが実際は滑走路は
所々コンクリートの跡らしい所を
見る程度でジャングルになつてい
る。

カンバさんの記憶をたよりに図
中⑥⑦⑧とやつと人が一人通れる
小道をわけてそれらしい場所を発
見した。既に午後五時。

それから佐竹さんは島の人々を
連れ⑬まで戻り白米を炊き、味噌
汁を作り、墓標・祭壇供物その他
をとりに行く。私はジャングル内
に残り椰子刀で雑木や蔓を切り払
い二十坪あまりの草を抜いて祭場
とした。石を長方形に並べたのは
土葬にしたときの跡であろう。近
くの海岸の波の碎ける音の外何も
聞えないジャングル内英霊の音が
聞えるような錯覚もする。佐竹さ
ん一行が戻つて来た頃はあたりは

既に薄暗くなつていた。写真もと



慰 靈 祭 図中⑩

つたが多分駄目と思つた。この作
業でシャツもズボンも真黒に汚れ
た。ゴム草履の鼻緒もぎれてしま
った。墓標を建て祭壇を作りそれ
を白布で覆った。慰霊祭に移るた
め汚れたシャツやズボンを、新し
いホンコンシャツ、黒の長ズボン、
黒靴にはきかえ、黒ネクタイを結
んだ。佐竹さんも黒のスーツに黒
の靴何れも黒の礼装となり祭壇に
供物を供えた。靖国神社から托さ
れた神酒、神饌、飲いたばかりの
内地から持参の白米の御飯、魔法
瓶で運んだ熱い味噌汁とお茶をは
じめ和菓子、洋菓子、煙草、海苔
ロール、線香二十種を超える内
地からのお供物を供え祭文を奉読
した。さぞ苦しかったであろう、
さぞ口惜しかったであろう勇士の
御冥福を祈った。つづいて佐竹さ

礁

環

んの焼香が長く続いたが、終わったとき両眼に涙が流れるのを見た。シンとしたジャングル内、墓地跡、こわれた大砲この環境の中で祭文を奉読し、焼香をするとき誰か涙なく過せようか。英霊が久しぶりに肉親にあえた欣びの声が聞えたような気がした。

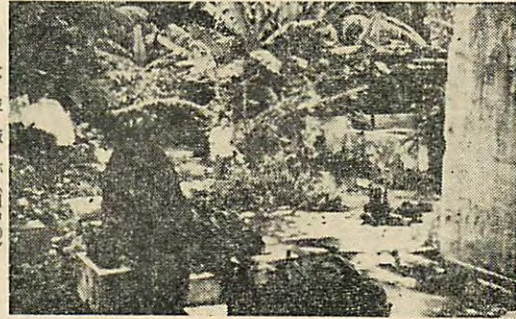
ヤムムラさん、カンバさん、そして手伝ってくれた島民の人々、みな焼香をして下さった。安らかな眠りを祈って既に暗くなった道を⑩まで戻った。

帰る早々佐竹さんほどの島でもした通り手伝った島民に日本の食事を御馳走する準備にかかった。持参の石油コンロで汗だくになっ煮たり焼いたり又切ったり転手古舞の重労働でやっと準備がととのい十余人の島民との会食が始まった。英霊に想い出深い民謡集をプレーヤーにかけた。島の人々も久しぶりの日本の味、日本の歌を心から悦んでくれた。時ならぬ日本民謡に沢山の島民が集っていた。十時過名残を借んで閉会にした。後片付を了えカンバさんの家に案内されそこに一泊した。

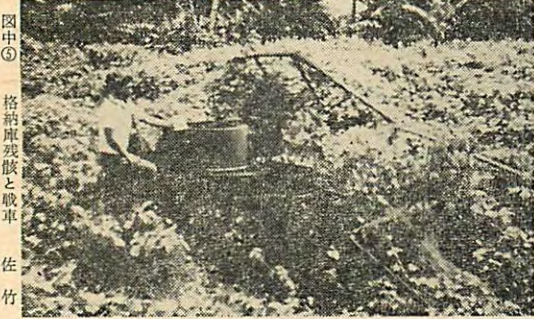
するだけのことを思ひまま行つた満足感もあって、枕もとに波音を聞きながらウオッセの夜は多くに更けた。

九月一日(金) 午前四時星明りに井戸水を吸み洗面・仕度・昨夜の⑩の位置に戻った。家人はなお熟睡中。カメラ三ツ、地図・戦史抜萃を携え戦跡巡視に出かけた。昨日カンバさん等と島の中部は見廻ったので大ていの見当はつく。図中⑧は陸上機隊航空指揮

所、大破して使用に耐えず、島にこれを修復する材料も技術者もないため毀れたままだが、ここには

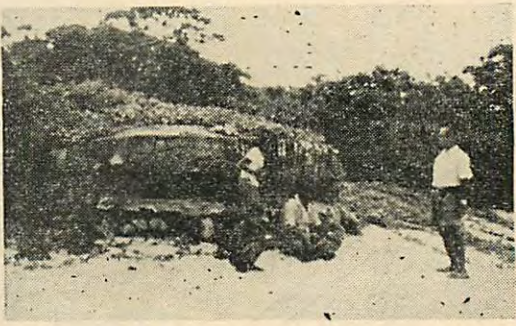


航空廠跡(図中⑧)

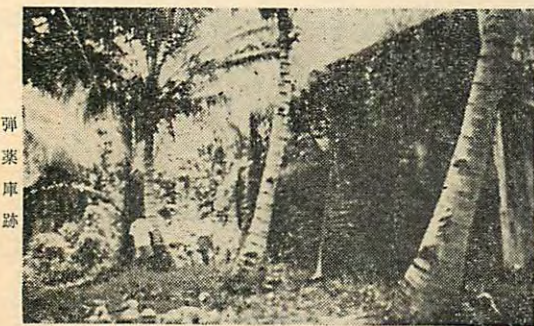


図中⑧ 格納庫残骸と戦車 佐竹

戦前から日本に大きな協力をよせた會長トメイン氏の長男が住んでいる。前庭に迫撃砲や三八式十五



図中⑨のトーチカ



弾薬庫跡

糧砲が飾られてある。数年前亡くなった先代トメインが日本を忘れられず据えつけたものと聞く。昨日の巡視中図中⑦を通つたと

き一人の婦人が我々を呼びとめた。昨年暮ハイネ長官のラジオ放送で我々の来島を知り、その後本人が拾つた大腸骨を今日まで祀っておいたという。誰の体の一部か知る由もないが有難く受けた。包装紙もなく新聞もない島である。なけなしのワンピースを洗い浄めそのまま遺骨を包んで、上に手製の造花(この造花は本部に保管してある)を添えた麗はしい、優しい心づかいが我々の胸を強く打った。

図中④は航空廠の庁舎跡であった。毀れたままであるが、錆びついたモーターや研磨機の周囲に日本の百日草やナデシコが戦の激しさを語った風に咲き競っていた。警備隊など引揚げ当時は私物も官品も細々したものがあったであろうが、今はその何物もなく、移動の出来ない建物や水タンクや機械が毀れたまま腐つたまま残っている。

図中⑤附近はすっかり雑木や雑草が茂っていた。格納庫のくづれた鉄骨、その中に置き去られたと思われる戦車が上部の一部だけあらわして我々に語りた気である。

図中⑨はトーチカ跡であるが、トーチカだけは島内四ヶ所共、昔のまま残っていた。図中⑩は海軍の十五糧砲々身だけが爆風でも吹きとばされたか転がっていた。島の南端の無線塔は一基だけ残

っていた。その中他基と同様錆びて倒れるのではない。主として八〇二航空隊と陸軍部駐屯した北方地域には庁舎、宿舍土台や、弾薬庫、公学校々舎跡などボンベイの遺蹟のように遺つていた。八〇二空の水上機用の滑りもそれと知らぬ。弾痕だらけで残つて原形をしのびようもない。

日出前から昼まで朝食も昼食も忘れて島内を歩いた。島民の殆んど全員に見送られ名残を惜み英霊の御冥福を祈つてウオッセ本島に訣れを告げた。ヤムムラさん御夫妻の親切、名も告げず遺骨を護つた一婦人の心境、三角先生には御恩はあつても我々には何のつながりもなく又今後の何の利害関係もないそんなピリモンさんカンバさんの態度、考えさせられた。どこで会つても誰もがイヤコエ(環礁七号一頁ハイネ長官挨拶参照)に笑顔で挨拶する。

かつて我々日本人の一人一人にあった麗わしい人情が「割り切る」という言葉で薄らぎつつあるのに反しマーシャルの島々には日本の遺産として英霊のまま残っている。その実態を今書くまで残して心からの御冥福を祈った。

二十四時間碇泊時間延長の約束どおり、船は午後一時錨を揚げてマジユロ島に向つた。

島の南端の無線塔は一基だけ残

忠魂慰靈碑除幕・清祓式に参列して

監事 岡野正文

八月十七日私共が待ちに待った忠魂慰靈碑の入魂式が迎賓館で遺族並びに来賓の参列のもとに靖国神社の宮司によって厳かに執り行われました。

数日來の天候とは打って変り素晴しい好天氣に恵まれ心から喜びに満ち溢れてうやうやしくお詣りをさせて頂きました。表紙写真のように菊花と緑の葉と白い布によって飾られ、竹とメ縄で清め祀られた慰靈碑を拝見しましたとき、その厳肅さと造形の美しさに心を打たれました。

今から約六年前志さす我々遺族が一堂に集りこの会の結成をみて以來会の目的の一大主柱となつていた「現地遺骨収集慰靈、現地え

の建碑」を固く念願し、お互に語ら合つてきました。が国際事情等もあつて実現は不可能と思われたにも拘らずこの二大事業が昨年からは今年にかけて時を移さず美事に実現されましたことは我々遺族の力はもとより、この会のためひたすら着々と目的の遂遂に精進込めて並々ならぬ苦勞を重ねられ献身的なご活躍を頂いた多くの関係者の方々のご努力、又建碑については各県産出の石のご惠送と種々ご協力を賜りました知事さんのお力添え等、総べてのもの結晶にはかならずぬと思ひ感謝感激は一入深いものがあります。

美しい御影石の台地には各県を表徴する県特産の石を布石組合せ

副会長加藤普佐次郎先生の御逝去を悼む

先生はここ数年高血圧のため御健康勝れず、御静養を必要とする御容態にありましたが、副会長というお立場から、御熱心な御指導をいただきました。

志を立てて法医学を専攻された先生は明治大学法学部講師として多年学生の教育に尽粹され又十八歳にしてキリスト教信者の生活に入られた先生は、多くの徒弟の指導にあたられ、信念の堅い、教育者として慕われておられました。

昨夏酷暑を北軽井沢に避けて

て出来た日本地図、又その石個々の持つ色彩と風格によつて表現されたその地図は偶然にも色の調和がとれていて何んとも云えない美しさであり丁度全国の遺族の方々の意思の結合とも申しますか誠に意義深いものを感じました。

この忠魂慰靈碑が南十字星の輝く南海の環礁クエゼリン本島の日

慰靈碑建設工程報告

クエゼリン 徳原徳子

十月二十九日(火) 朝パンフィックアイランド号クエゼリンに入港。早速荷卸しにかかる。徳原写真撮影。ミラー司令官と信託統治領事務所所長オウンベリ氏他船シテムラム船長より供物その他荷物受領。供物等すべて司令官々邸に保管。慰靈碑の包装木箱四個は倉庫に保管。

十一月二日(土) 倉庫のトミー小島氏の協力に依り数名の日系人の手で荷を開く。この状況は福田氏が撮影。突然の大スコールにもかわからず無事開け終り防水布でカバーする。

本人墓地に建てられて未永く英霊の冥福を祈念いたすならば、尊い命を捧げられた数万余の英霊一柱一柱の心をお慰めいたすことは勿論のこと、この石の下にあって静かに遠く故郷のことどもを偲はれつつ祖国の限りない発展と平和を安らかに見まもつて頂けることでしょう。

予定でしたが砂地で柔かすぎるのでステイルバーを使用したわけです。セメントを流せるばかりに用意しました。

十一月七日(木) セメント流し込み終了。乾いて固まるまで四・五日待機。

十一月十三日(水) セメントの粹除去(徳原のみ)

十一月十四日(木) 基礎石を置く。水平に置くことが意外とむづかしく時間かかる。

十一月十六日(土) 明月完成させる予定なので、その準備をしました。石の角がいたまなない様各角に木片をあてがう。機械、工具その他必要なものを全部墓地に運ぶ。石を吊り上げるためのワイヤーの長さが不足なのでそれをつぎ足す。同夜バティの席でミラー司令官その他陸軍の幹部数名に会つたので来週中には完成し、祭典が出来そうだから、それに出席するよう依頼しました。

十一月十七日(日) 午前八時作業をはじめました。基礎石の(11頁につづく)

忠魂慰靈碑に使用した都道府県の銘石

三重	紀州那智黒
滋賀	まごろ石(瀬田町産)
山口	黒御影石
高知	紅麻石
宮崎	紅碧玉石
北海道	十勝御影石
岩手	白御影石
新潟	糸魚川産ヒスイ原石
群馬	赤城小松石
埼玉	秩父赤石(チャート)
岐阜	日吉桜(花崗石)

石の名をお知らせ下さったものを載せましたが何れも立派な銘石しかも知事の御揮毫は夫々の御風格が偲ばれます。

同夜或る人の送別会がミラー司令官々邸で開催、私共夫婦も招待を受けたが客間には船から受領の荷物が積まれてあつた。貴会から贈呈のサントリー・ウイスキーはミラー司令官が喜んで試飲されたとのことでした。

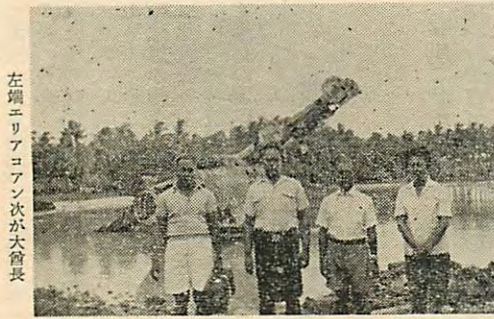
十一月五日(火) 墓地に穴面通りのサイズの穴を掘りました。その穴にセメントを流すための木枠は木工工場で作されました。

マキン島

現地派遣員 佐竹エス

昭和四十二年七月二十三日昨夜タラワ島でにぎやかな一夜を過ごした。早朝までには全員はがらかに帰船し、午前八時十分鐘を過ぎてタラワ港を出港し一路北上してマキン島へ向いました。イギリス領ではあり、あまり用事もないところなので船員も船客もマキンは始めてという人達ばかりです。私達現地派遣員が戦跡を弔い、遺骨を探し、慰霊をするというだけでマキン島にゆくので乗組員も船客も気楽らしく、船上では狭い船倉の上やら、上陸に使うモーターボートの中、所ぎらわず船客の奏でるステイールギターに合わせてフラダンスを踊ったり歌ったりにぎやかです。四周島影も何もなく、水平線のみともなると船の動揺激しくなり、船首に大波をかぶりその度にすくい上げた海水が船の両舷を急流となつてザブザブと前後に往復するようになつたがそれをかき分けす様な賑さがつづきます。私は始めての船酔い、食欲もなく、船倉の上へ渡された板の上に横たわつたとき、頭を持ち上げるのもおっくうになり、皆さんに誘われたコーラスやフラダンスも横になつてながめ、何とか気分を持ち直すよう努力するの精一ばいばい。明日のマキンでの行事がよく出来るよう祈りながら。

「マキン島近くに来ました。ここに明るくなるまで錨を入れる」とのことでした。マキン島も珊瑚礁の環礁です。月明りに大きな細長い椰子の島が見えていました。マキン島に電灯のあたりが見えましたがマキン島は電灯もないので、静かな椰子の島が見えるだけ灯は全然ありません。珊瑚礁の内に入るのは水道という深い所を通過しなければなりません。マキンには北水道・中水道・南水道と三つの水道があります。普通南水道を通るそうです。自然に出来た水道です。近代船には測深儀やレーダー等があつて刻々機械が水深を教えてくれて案内誘導しますが、このラリッタタタタ号にはそういう機械もなく、船長や航海長の感を頼りに船をすすめる航海です。島の形は長いか短いかというだけの違いで区別がつかせませんが、波の形や方向それと風の方向で自分の位置がわかる。これがマキン航術です。船長から聞きました。たしかに夜航海をして灯台も民火も何もないマキンについて水道の外まで来たものです。マキンの港外には来たものの水道がわからない上波が高く船が流されるおそれもあるので島影を見失わないところまでエンジンをとどまらして面舵を取舵前進後進と苦

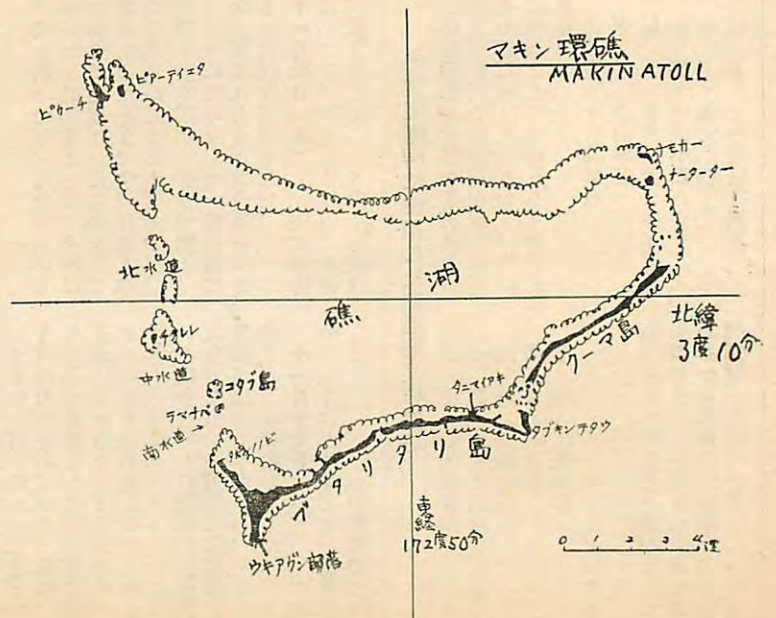


左端ニアコアン次が大會長

勞していましたが、やがて空が白むにつれて水道がわかり南水道から無事礁湖内に入りました。礁湖内はさすが波も静かになりましたので朝食をとりその中七時に錨がおろされました。

昨日タラワ島のブライアン、エフ、ウィークス長官からラジオ放送によつて連絡指令があつたことので大會長シュターケさん以下四名の政府役人の迎えのボートに乗りマキン島の唯一の突堤端に上陸しました。これは島の中央部に農村の畦道を思わせるような荒れ果てた小道がのびている突堤でその先端まで総勢一〇〇人位の島民が私達を見物に集まっています。

礁湖に入った六時頃からボツボツ突堤に集まつて来るのが見え、高い口笛が聞えていました。ギルバートスタイルの男子は概ね上半身は裸で、下は巻スカートです。南方人好みの原色模様できは



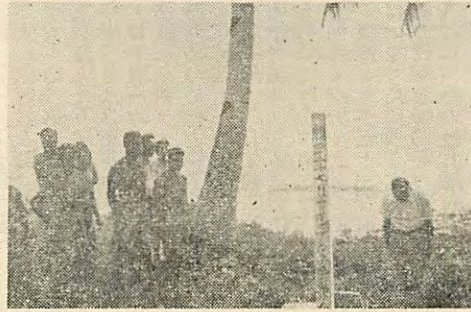
つなものであるが、身分によつて色別されているようです。政府役人や大會長は濃い紺色の短かな巻きスカートつまりミニスカートのようなものに幅広い皮のバンドに大きな銀色のバックル、白いシャツですが大會長始め跣足でした。女性はさすがに裸は見られませんがマキンと同じく日本の簡単服を着ていました。

迎えに来た政府のボートで突堤につき上陸したのですが大勢のギルバートスタイルの大男が無表情の顔付で、私等の前になつたり後になつたりして来ます。政府役人の先導であり大會長もついていますが一寸恐怖を感じました。突堤をかたちづくっているその畦道のような道を歩き切つたところ果物やコンビニの缶詰等が少しばかり並べてあります。そのすぐ近くの海中に日本軍の大型飛行艇が今なお無残な姿をのこしていま

した。大會長が現在マキンには日

本の遺した武器はこれだけでずとのことで大酋長と共に記念撮影、英霊を偲び乍ら。

二百米ほど歩き島の中央部の唯一の本造本建築医師エリア・コアン氏宅に案内されました。収骨、戦跡の訪問、墓標の建立、慰霊祭等来意をのべお願いしました。



マキン島での慰霊祭

こころよく引き受けられ、まず墓標やお供えの品々を自転車に積み、かつて金光指揮官等を埋葬してあったという礁湖側、突堤から西方三百米位、沖には中国の沈船の見えるという場所でした。

島中総出といいたいように大勢集まり手伝つて下さいました。浮田さんの奉読する祭文を、遠巻きに囲み珍らし気にながめ、私の焼香後大酋長シユターケ氏、ラリックラタック船長デ、ブラム氏の焼香が続ぎ一本宛線香を立て、私と同じように合掌しています。

無表情な裸の大男もハニカミ乍ら又抱かれています。たいげな子供もわからない乍ら焼香が続きました。終了後大酋長の案内で、昭和十七年八月米奇襲部隊と激戦があったという外海岸まで十八年十一月大部隊が揚陸したウキアガン部落にコンビーノビ地区など戦跡をすつかり歩き回りましたが、島内は整地され、椰子林やタロ芋畑が続いていて、タラワ島と共に玉碎するほどの激戦のあった島とは思われない平和な姿でした。

マキン環礁は八カ村に分れ、人口三千人、主島はこのブタリタリ島ですとのことですが電気もなく自動車もありません。自転車と数台の日本製のオートバイが目についただけで上半身裸、跣足という大男の多いように見受けました。

ところどころ合掌造を思わせる比較的高い椰子の葉を葺いた建物を見ますがそれは教会又は部落の集合所で島民の住家は粗末な椰子の葉を葺いた家でした。

日本語の出来る人が居ないせいでしょうか。精一ばいの好意を示して呉れるつもりか何時も大勢集って私達を取まいていました。

島内を一週し前記のエリア、コアン氏宅に帰りました。昨夜のタラワの長官からのラジオ指示によつて大酋長初め政府役人との会食の招待を受けました。このように申し上げますといろいろ豪華なご馳走を想われる方もあります。うが、ここまで書きまじした島の様子からもご想像いただけるように至つて粗末なところですから精一ばいのご馳走といつてもコーヒーやタロ芋料理です。タロ芋は里芋

のオバケのように大きなものです直径十五センチ、長さ三十センチもあるもので味も似ており南洋で出来る食べ物の中では一番私の口にあったものでした。大い私塩ゆで(海水で煮たもの)のものでしたがこのときはこれをつぶして中にコンビーフをいれ、それを椰子油で揚げた高級料理でした。それにコアンさんが飼っていた鶏をあげたものなど心からのもてなしでした。どここの慰霊祭のあとでもしたように日本からの土産目覚時計はじめ沢山の品々を差し上げ、慰霊碑をお守り下さるようお願い致しました。

この島としては始めての日本女性の大陸ですといわれ、注視されましたが何とか来島の目的も事なく終了したようでした。

英霊の安らかな御冥福を祈りました。二十数年前を思い去り難い気もちにかられましたが潮流のため暗くならないうちに水道を航過しなければならず激戦の行われた海岸の霊砂を集め帰船することにしました。

シユターケ大酋長からはマキンの民芸品椰子の葉で編んだ綺麗な敷物をお土産に頂き大勢の見送りを受け乍らボートに移りました。

四時ラリックラタック船上から見える墓標に最後のお袂をし御冥福を祈りましたが、その中錨が揚げられ次の訪問地オーシャン島へ向いました。オーシャン島はここから更に南下し赤道を超えた南半球にあります。

尾崎キエ様からの便り (四月三日夜)

佐竹エス様
今日新聞にてマインシャル群島慰霊団の記事を見まして、驚きと喜びでも、ただ胸の熱くなる思いで居る者です二十余年前のあの激しい空爆下のクエゼリン島で御主人様を亡くされた貴女様が今度遺族を代表されて、浮田様と共に、はるばるマインシャル島各島々に慰霊の旅にお出で下さるとのこと、今、貴女様のお喜びに満ちた笑顔のお写真を前にして、何か私もちつとして居れぬ思いにどうすることも出来ませぬ、お手紙を通じ、私の願も届けさせて頂きたいと甚だ身勝手な恥入りますが、思はずペンを書らせて居ります。

思えば長い長いこの年月をこの日の為に浮田様初め皆様はどのようにな御苦労があったことかと、もう感謝の念で一ばいでございませぬ。私の主人は昭和十八年四月召集を受け、横須賀に入り、同年の六月頃にウエッセ島に上陸したようでございます。そして二十年一月十七日この島で亡くなって居ります。名前は尾崎重男と申し終戦の後伝えられましたことは主人の隊は海岸近くの洞くつのような所にあつて、激しい空爆にも幸いな怪我一つなかつたのが食糧尽きての餓死だったさうでした。ウオツゼ人達が多しと聞いて、居りました。大抵の兵が同じ運命で亡くなった人埋めた上に棒切れに等しい形許りの名前を記した墓標が立てられたさうですが、二十余年後の今日

では其の跡をも止めぬことになつて居ることでございます。其のウオツゼ島にも貴女様が慰霊にお出で下さいます。私はどんな形でもよい。この長い年月の祈りを、思いを伝えたい。新聞を手にしたまま、私は、云ひ現はせぬ焦慮に戸迷つて居ります。同じ東京に住むならば貴女様の許に早速かけつけるのをと、ただ、幾度も新聞の記事を読みかへし、貴女様や浮田様の笑顔あふれるお姿を眺める許りでございませぬ。そしてついに貴女様にお手紙をさし上げることになり至りました。

此の度の念願達成の喜びを共にしている者が、北海道の片すみにも居ることを知って頂きたいと存じました。貴女様が此の手紙をお読み下さる。此の文字を其のお目にとどめて下さる。それだけでも同じ悲しみを経て来た者の、一筋の御縁がつながるように思えてなりません。其の貴女様がウオツゼ島に行かれて、其のお目で、夫最後の地を見て下さる。島の石ころ、草や木にも、ふれて来て下さる。そして多くの慰霊された人々と共に眠る夫の霊に慰霊の真心を捧げて頂けるとの勝手な考え方ですが、そう思いたいでございませぬ。

クエゼリンに各島を代表して慰霊碑を建立されるとのこと、異国の島々に眠る人達も初めて満足の眠りにつかれることと存じます。長い慰霊の旅路の上に、恙なきようにと心よりお祈り申上げ遙かなる旅路安かれと祈りつつ。

マキン島戦史

浮田 常任幹事編

ギルバート諸島は、敵が利用するのを阻止することやそれを監視するだけでなく、太平洋防衛圏の一環として、米軍の脅威を除き、広く南太平洋の哨戒、偵察するための基地とし、南洋群島防衛圏の安全を確保するため占領する必要があった。

このため第十九戦隊（旗艦は敷設艦沖島であった）、第二十九駆逐隊の駆逐艦夕風、朝風の二隻、ヤルー島の第五十一警備隊が攻撃支援隊となり、開戦の日昭和十六年十二月八日ヤルー島を出撃、十日午前一時夕風、朝風は、聯合陸戦隊をタラワ島に揚げ、午前六時同島の掃蕩を完了した。

又第五十一警備隊陸戦隊と沖島の陸戦隊は同日午前二時マキン環礁中ブタリタリ島に上陸して掃蕩を行いこれを占領した。

沖島・夕風・朝風の陸戦隊は艦に復帰したが五十一警備隊陸戦隊はマキン島に残り水上機の航空基地を設定して、その防備、警戒に当った。その後しばらくは、この方面に敵出現のこともなく過ぎたところを翌昭和十七年八月十七日未明全く突然、総員起床（午前

ら潜水艦ノーチラス、アルゴンの二隻に分乗してマキン島に近接上陸用浮舟によって環礁の外側海岸から上陸したものであった）

急報によって第六十二警備隊（当初の第五十一警備隊は十七年四月十日第六十二警備隊に改編された）のマキン派遣隊（隊長は福岡県嘉穂町出身・金光九三郎・当時海軍兵曹長）と第十四海軍航空隊基地員等合計約七十名は直ちに、トラック及び機銃車に搭乗して出撃し、午前三時半、敵と激烈な遭遇戦を展開した。陸戦隊は金光指揮官が陣頭に立って奮戦したが、多勢に無勢、午前五時半、米軍のため完全に包囲された。本部との連絡も杜絶し、弾薬もまた欠乏し危険の状態に陥つたので、金光指揮官は部下十一名に陣地線の死守を命じ自らは爾余の兵力を率いて「午前九時五十分全員従容として戦死」と最期の電報を発信し、突破口を開くべく、突撃を敢行したが衆寡敵せず、目的を果さず全員戦死するに至った。残された十一名は飽くまで抗戦を続け死守した。

敵米軍は同夜夕陰に乗じて包囲を解き潜水艦に退去したが、一部は混乱と磯波のため翌十八日の夜間までかかってやっと退却した。なお九名の米海兵隊は島内に取残され、その後捕虜となった。

本戦闘での我軍の損害戦死四十

三名、行方不明三名計四十六名であり、生存者は整備隊員十八名、航空基地員三名、その他六名、計二十七名であった。

その後しばらく敵襲の徴なくタラワ、マキンの戦備工事は妨害なくすめられた。

かくて昭和十八年十一月中旬頃のマキン島の防備は次のとおりであった。

陸戦隊員 二五〇名
九五二空基地 四五〇名
八〇二空派遣員
設営隊員等
武器持たぬ者
計七〇〇名

防備兵器は
八種高角砲 三門
八種高角砲 三門
十三耗機銃 十二門

昭和十八年十一月十九日未明から米機動艦隊の艦上機延数百機がタラワ島、ナウル島を目標に大空襲をした。翌二十日には米機動部隊の艦上機とB 24が、前日にも増してタラワ島、マキン島に空襲を加えた。

米戦史によれば二十日マキン島には一八トンの爆弾を投下したという。

統一は二十一日午前一時米軍大部隊がタラワ島に出現し、海空部隊の援護をうけつつ上陸を開始した。マキン環礁のブタリタリ島にも同じ時刻に殺倒し、上陸を敢行した。午前四時半には既にタラワ島の本隊との連絡は途切れた。タラワでもその日正午頃司令部防空壕に直撃弾が命中し柴崎司令官以下幕僚の全員が壮烈なる戦死を遂

げた。部隊はかねての計画に従って、戦闘を続け、米軍を圧迫したことを終始連絡していたが二十一日午後一時三十分「敵艦艇・爆撃ノ支援下、人員、資材ヲ引続キ揚陸・棧橋ニ通ズル南北線附近デ彼我交戦中」という電報を最期に無線連絡が途絶した。

その後タラワ・マキン両島の我軍の電報入手なく状況は全く知る由がないが友軍航空偵察の結果や米軍の諸情報・戦史を綜合すればマキン島守備隊は二十四日にタラワ島守備隊は二十五日にそ

宮崎正統様からの便り

佐竹エヌ様
この度「マーシャル」諸島への初の慰霊団として、はるばるのお出かけの由誠に有難いことと思っております。さぞかし亡き戦友の霊も喜んで下さると思ひます。

降つて私は、昭和十六年開戦前から第六根拠地隊司令官指揮下のヤルー島升田仁助少将司令のもとで信号兵として従軍し終戦を迎えました。

その間司令を始め多くの戦友とも死別、今日まで一日として忘れ得ない日はありません。

どうかお体に気をつけ心ゆく迄慰めて来て上げて下さい。心からお願ひ申し上げます。

それから甚だ恐縮に存じますが私は「ヤルー」から開戦と同時に、ギルバート諸島のマキン島へ進駐、第一回の米海兵隊上陸（昭和十七年八月）当時マキンに居まし

れぞれ玉碎した模様であった。二十五日米軍はラジオでタラワ・マキンの完全占領を發表した。日・米両戦史を綜合するとマキン島に上陸の米陸軍は六四七二名で日本陸戦隊二八四名に対し、約二十三倍、タラワ島に上陸した米海兵隊は約一八六〇名で日本守備隊四五〇名の約四倍、そして支援部隊は我軍の殆んど皆無に對し敵は大部隊の艦船、航空兵力・衆寡全く敵すべくもなく玉碎に至った。

同年末ヤルー島へ復帰。その間中国系の原住民ピナターケ（ピナビラ）（才位）兄弟に大変お世話になりました。彼等は十六年七月頃毎日ウキアガン部落から、島の中央にあった教会に通つておりました。マキンに行かれるそうですが若し機会がありましたらこの兄弟の宛名を調べて来て頂けないでしょうか。御多忙の日程を、甚だあつかましいとは思存じますが出来ましたらお願いいたします。若しこの兄弟に会えましたらミヤサキより宜敷くと伝えて下さい。

本十日熊本日新聞を見てはるばるマーシャル諸島への慰霊を知り取急ぎ一筆書いておりますが果して御出発迄に間に合いますかどうか、若し届きましたら宜敷しくお願ひ申し上げます。

「タラワ」戦二十五周年

記念祭典への招待

去る十月二日在京英国大使館附駐在武官ビバー、エッチ、ヒスロップ陸軍大佐から。

「タラワ戦二十五周年を記念し十一月二十一日二十二日二十三日記念祭典を行うことになりましたが、これについてギルバートエリス植民地の弁務官事務所から次のような知らせがありました。この祭典に参加を希望する日本人は、どなたも歓迎します。ただ遺憾ながら旅費、宿泊料はお手伝いできないので参列各位で御負担下さいとのこと。たしか御関係あることと思しますのでお伝えします」という内容でした。

本部は早速BOAC(英国航空公司)に航空便の時刻表、運賃等尋ねました。

航空路は羽田空港からホンコン(週四回)にゆき、乗換へて濠州のシドニー(週二回)に行きます。更にシドニーからヴィテラ島(Vitellia I)のナンジー(Nandji)空港に寄って、更にナンジーからタラワに行くこととなります。

羽田からシドニーまでは他の航空会社の便もあり又シドニーからナンジーまでも毎日あって便利ですが、ナンジーとタラワの間は週一回日曜毎にあるだけです。

次に運賃は羽田・ナンジー間二等往復邦貨四十万三千五百円、ナンジー・タラワ間往復十五万三千

六百円計五十五万四千円となり、この外、飛行機便待ちの宿泊料やタラワ島滞在費を考えると相当の額が予想されます。

従って本会から代表を派遣することは不可能であります。ただかねてからギルバートに行けるようになったたは是非一度行きたいから知らせてくれとの、御依頼もあつたので、好機と思ひギルバート諸島即ちタラワ・マキン、アバママ等での戦死者御遺族にお知らせして希望者を募りました。

五人の方から、更に詳しく知りたいとの問合がありました。それぞれ理由があつて切角の招待も受けられず十一月二十日

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

コブラの外はこれといって産物のないところ、従つて定期航空も定期船もたまにしかなく、よほど回り道をしなければ行けないところ。しかしこの島では日米両軍は多数の戦死者を出しましたが英国人及び島民は今なお日本人には好感をもつています。

今回は日時の余裕なく渡航の実現が見られませんが、今後もし墓参渡航をなさり方がありましたら本部に御知らせ下さい。

山田徳子さんのことども

山田徳子さんと呼ばば、御記憶の方があつたかも知れません。昭和四十一年八月ガンナトス・ノット号が横浜山々内埠頭に着きました。その頃の本会は、たとえ一つでもマージナル諸島の現状について資料の欲しいときでしたので、私はその船に行つて船長に会いいろいろ尋ねました。その船はクエゼリンとマジュロに寄港するだけでマージナルの島のことは聞けません。話している中にマジュロ島のミスマダを知っているかと聞かれました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

徳原徳子さんのことども

徳原徳子さんと呼ばば、御記憶の方があつたかも知れません。昭和四十一年八月ガンナトス・ノット号が横浜山々内埠頭に着きました。その頃の本会は、たとえ一つでもマージナル諸島の現状について資料の欲しいときでしたので、私はその船に行つて船長に会いいろいろ尋ねました。その船はクエゼリンとマジュロに寄港するだけでマージナルの島のことは聞けません。話している中にマジュロ島のミスマダを知っているかと聞かれました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

「タラワ戦において戦死された殉国英霊の冥福を祈る」と本会々名においてギルバート、エリス植民地長官に電報を打ちました。

お目にかかりました。

四カ月の現地作業を了えて、マジュロを去るときは、正式に婚約も成立しましたが、徳原さんの休暇とか山田さんの退職許可の関係もあって、挙式ができず、私共は山田さんの見送りを受けました。

この七月末マジュロで華燭の典を挙げられ、九月二十一日クエゼリンのクラブでの結婚披露パーティには二百人も来賓の祝福を受けられました。その中にミラー新司令官の顔も見えた由です。そして今日現在エビゼ島に新居を構え、徳原さんはそこからクエゼリンに通動しております。

ミラー新司令官は慰霊碑建立の作業は一切を徳原さんに一任し、本会から司令官と徳原さんに送った書面、図面は全部徳原さんのところに集まり、図面通り建立するよう命令された由です。

徳原夫妻が主になって工事をすすめているのが7頁の建設工程報告であります。

（7頁よりつづく）

上に本体及び屋根石を置き殆んど完成。午後四時まで作業を続けましたが、あと囲りに小石を敷き、墓地を清掃する仕事だけ。

十一月十九日(火) 墓地の清掃、最初に掘った土を土台の周囲にかけ、地ならしをしました。そのときまた人骨が出て来たので、集めて埋めました。あとは小石を敷くだけの仕事です。碑には新しいシーツをかけ、祭典の日まで覆っておくことにします。

なお石はすべて無傷で完全な状態でしたことを申添えます。

昭和四十四年二月六日の慰霊祭御案内

来る二月はタワラ・マキン玉砕後二十五年二月カ月、クエゼリン・ルオット・ブラウン玉砕後二十五周年になりますから、前号で予告の通り二月六日には二十五年祭が行なわれます。この行事につき會員皆様は御聞きしたのですが、本都一任の外御意見がありませんでした。そこで予算の関係もありませんので慰霊祭・定期総会・皇居新宮殿(十一月十四日落成)拝観・現地報告会を行うことになりました。

大体の日程は前日(五日)九段会館に宿泊希望の方の御世話は例年通りいたします。六日は午前靖国神社で二十五年祭を行い、あと九段会館で昼食と定期総会、午後バスで皇居新宮殿の拝観・都内観光後九段会館前で解散。六日宿泊希望の方の御世話もいたします。現地報告は、まだお聞きにならなかった方のため、二月五日の夕方と、二月六日の午後と夕方の三回を行います。

二十五祭祭次第
一、靖国神社での慰霊祭
祭典は二月六日(木曜日)午前十一時にはじめます。

このため受付は、午前九時三十分頃から、靖国神社参集所入口で行いますからお早目にお出かけ下さい。

各島靈砂、組写真等受付に用意いたしますが、準備数の都合もありますので予め御申込み下さると都合です。

二、定時総会
昼食と共に九段会館で行いま

す。靖国神社での慰霊祭典終りましたら誘導いたしますので、九段会館大食堂にお移り下さい

三、皇居新宮殿拝観
午後一時九段会館前に準備したバスに分乗、皇居新宮殿拝観後、都内交通制限時間の許す限り都内観光

皇居拝観のため参観者名簿を宮内庁に提出しますので、拝観希望者全員の住所・氏名・職業・年令を同封のハガキで予めお知らせ下さい。

四、現地報告会
まだお聞きにならない方のため左のとおり三回行います。

前記諸行事と皆様の東京発の時間の御都合もありましようから何れかの回をお選び下さって、予め同封のハガキで御申込み下さい。

回次	日	時	場所
第一回	二月五日	午後六時	九段会館
第二回	二月六日	午後一時	六日受付でお知らせします
第三回	二月六日	午後六時	せしめます

報告は現地派遣員及び帰還者有志の方、時間は二時間の予定。

五、その他
(一)準備の都合がありますので二十五年祭典・昼食・バス観光報告会出席の方は同封のハガキに御記入の上十一月十一日迄に必着するよう御返事下さい。

(二)二月五日六日共五十名分の宿泊予約をしてあります。御申

込順に決めてまいりますので宿泊の方は特に早目に御返事下さい。

(三)宿泊御希望の方は同封のハガキと同時に宿泊料・一人二食付千二百円本部まで御送付下さい。

(四)二月六日の昼食代一個一五〇円、観光バス謝礼一人一五〇円は当日受付でいただきます以上であります。くれぐれも早目に御返事下さること、多数御参加下さいますようお願いいたします

昭和四十三年靖国神社秋季例大祭に参列して

浮田 信家

私は仕事の関係もあって、戦前から靖国神社春と秋の例大祭には必ず御案内をいただきいつも参列させていただいで居る。

今回は諸員着席修祓にはじまり、宮司開扉、献饌につづいて

宮司の祝詞奏上が行われた。私共ややもすれば緩みがち気持もこの祝詞奏上に至って、靖国の神に触れた如く緊張する。

祝詞奏上から勅使参向まで毎回若干の時間があるが、シーンとしたその時間に、戦死者の遺言その他を放送される。今年には遺された和歌三首が奉読された。

ふるさとの母の便りにつよきこと言いはをれど、老ひし母は昭和二十年五月二十九日

神風特攻隊、振天隊にて沖繩攻撃の際散華

海軍少佐古川 正崇(23才)

人ごみに、笑みつつ送る妻よよ切なさ過ぎて、我も笑みつつ

昭和二十年五月十四日

滋賀県上空にて空戦々死

海軍大尉石川 延雄(23才)

君が為め 何か惜しまん わが桜散って甲斐ある 命なりせば

昭和十六年十二月八日

真珠湾攻撃の際散華

第二五二航空隊員(本隊はマロエラップ島)がウォッセ島で戦死の例

酒 匂 辰 生

長谷部義胤殿(戦死者の兄)
小生儀昭和十七年十月第二五二航空隊通信長兼分隊長として、御令弟信義君等と共に出征、ラポール、バラレ島(シヨートランドの隣島)を経て、マーシャル諸島に転戦(ルオット)昭和十八年十一月マロエラップ環礁に転進共に勤務中、同地も漸く戦闘が激化して

海軍大尉 古野 繁実
参列諸員一同感無量。やがて拝殿正面に参進の勅使の木履の音が静けさを破って近づくのが聞えた。

地方での現地報告会

五月二十七・八日京都での慰霊祭・現地報告会に続き左記のとおり地方での報告会を行った。どこかの会場でも、予想もしないお満足をいただいた。熊本、長野では小さいながら地方新聞の一隅にこの催しの記事も掲載された。

日	地名	会場	参加報告員数
8.4	愛知県	ホテル 喜楽	17
8.25	岐阜県	護国神社	70
9.22	熊本県	共済 会館	102
9.26	長崎県	遺族会	15
9.29	佐世保市		浮田
10.26	山梨県	簡易保険 センター	22
	石和町		浮田

月には三千四百名位いた人員が、本年九月十五日現在千七十名に減ずるといふ悪戦苦闘を重ねましたウォッセ島においても同様な事情であった模様ですが、生存者は去月十一日浦賀入港を殿として、同方面は全部復員いたしました。

既に人事部その他から通知があったことと思いますが、信義君は昨年二月十三日ウォッセ島の受信所(同島第一の洋式建物)に於て敵機の直撃弾に依り壮烈なる戦死を遂げし由。敗戦となり殊更気の毒に耐えませぬ。御遺骨はウォッセ引揚の際戦友と共に帰還せし管につき既に届いたことと存じます。

(一頁よりつづく)

日あるのは、偏に大戦に散華された英霊のおかげであり、その成果は正に世紀の偉業である。

私も遺族は、靖国の英霊安かれと祈ると同時に、英霊の念願されているところを思い之に応えなければならぬ。

それは私なりに考えると、遺族の全員が幸せに暮し、この日本を住みよい幸せな国にするように努力することである。

二十五年祭の歳の新春に際し英霊の偉業を偲び、遺族の一員としての覚悟を新たにするのである。(常任幹事)

忠魂慰霊碑竣工に寄せて

成田 喜代治

驟雨洗ひ 落日染むる 碑を想う
日々に我が踏みし 浜辺の路に

渚辺に 方向定まれる
風ありて ひねもす純白の
ガーゼを反しつ

草の上に 月おし照りつ
島の夜は 敵襲絶えて
虫なきさほふ

註・本誌次号から掲載のクエゼ
リン島陣中日誌の執筆者・元第
六十一警備隊司令の御寄稿

環礁ミレー抄

成宮 芳三郎

白き雲 また涌き出づる
環礁に 航空基地の
占む静けさ

現地報告会に感謝して
荒井 福栄

スコールの からりと晴れし
午さがり カヌーの白帆
かしぎゆく見ゆ

くもりつつ 海くれにけり
静かなる そのひとときを
椰子の間に立つ

よもすがら 常夏の雨
ふる島に 早しぐれいむ
ふるさとと思ほゆ

遠き日の 想い新たに
滂沱する 涙の中に
スライドの花

冴えまさる 椰子むらの上の
望の月 見守り居れば
こころ澄みゆく

肌の色 変れど変らぬ
人情が 種から育て
咲く月見草

君がその 若き血潮で
染めし鳥 かすみで浮ぶ
老いしわが眼に

註・クエゼリン島にて玉砕戦死
者の妻

ヤルト島

当日歌

一、遠いあの空 遙かな波路
偲ぶ故郷よ 花咲く日本
咲くか春風 ちまたに里に
夢で見ましたふる里便り
あの山あの河あの森よ
浮ぶ笑顔のなつかしさ

二、案じ召さるな 父母上よ
便り出来ねど元気で居ます
月も今宵は おぼろにうるむ
みんな見てるかあの縁側で
妻よ坊やよ 妹よ
無事で達者で 居ておくれ

三、日毎敵機を 迎へて送る
ここはマインシャルヤルト暮し
弾丸も乏しく 食さへないが
なんのつらから 捨石覚悟
頑張ろうよ朗らかに勝つ日迄
祈る夜空に 十字星

註・ヤルト戦友会から御寄稿
イミエジ島或はエニボール島
守備の陸軍部隊が椰子の葉茂
の浜辺で 口づさんでいたと
聞く。

会計中間報告

常任幹事 佐藤 宗 丕
同 屋間 楽 平

会員皆様の御協力に厚く御礼申
上げます。昨年の現地慰霊、調査
に引つづき、今年も現地慰霊碑建
設という大事業を成しとげまし
た。

事業の内容は別項で御報告の通
り極めて順調に推移しており、経
費の面では夫々の事業に関係され
た方々が皆本会のあり方に御賛同
下さって格段の御奉仕を賜りまし
た。お蔭様でやりとげた仕事の内
容に比べ、支出した経費は驚く程
安く済みました。

本日以後支出するものとしては
この環礁(九号)の刊行費(印刷
費、送料)と、現地に委託した墓
地造成費、慰霊碑建立工事費等
であります。現地の所要経費の明細
は未だ通知されませんが、はつき
りわかりませんが現在の手許金で
は必ずしも安心できませんから日
常経費は従来通り引締めておりま
す。

今後共従前通りの御協力を頂き
とう存じます。

会計現況報告 (自43. 1. 1 至43. 10. 31)

1 収入	42年度より繰越	676,242	定期慰霊祭費	51,800
会費寄附金その他	1,760,481	現地報告会費(京都)	14,040	
受取利息	13,667	事務所借料	100,000	
収入計	2,450,390	事務振替	6,760	
2 支出	現地慰霊碑建設費	856,825	雑費	1,290
事務用品費	17,079	3 現金預金	1,727,671	
印刷費	84,475	現金	16,669	
刊行費	153,507	貯蓄	69,924	
会議費	5,400	普通預金	99,290	
運営費	358,767	通知預金	536,836	
信費	77,728	現金預金	722,719	

寄附者芳名

(三三五名)

今回も数多の篤志会員その他や会員各位から左のとおり多額の御寄附をいただきました。この外に昭和四十三年定期総会で決定された年度会費をいただいて居ります。現地建碑のため全国都道府県からいただきました助成金につきましては建碑関係収支決算完了の上報告させていただきますと存じます。御協力を深く感謝いたしますと同時に本会の念願である慰霊に事欠かさぬよう一層の努力を続けたいと存じます。

(昭和四三、五、一から昭和四三、一一、三〇までに入金した分)

寄附額 芳名(敬称略)

篤志会員その他

三〇〇〇	井上 義夫殿
二〇〇〇	高田 源次郎殿
二〇〇〇	太田 清殿
二〇〇〇	柴田 進殿
一〇〇〇	藤田 福助殿
一〇〇〇	木下 甫殿
一〇〇〇	斎藤 周助殿
一〇〇〇	長谷川 栄次殿
一〇〇〇	三宅 藤之介殿
五〇〇〇	渡辺 勝殿
五〇〇〇	日黒 袈裟喜殿
二〇〇〇	尾崎 キエ
二〇〇〇	母 野戸 タカ
一〇〇〇	父 三関 武治
一〇〇〇	父 高橋 直助
一〇〇〇	父 浜 権五郎
五〇〇〇	母 鈴木 トミ
五〇〇〇	長女 伊藤 フジ
一〇〇〇	父 北村 弥三郎
一〇〇〇	妻 白山 光枝子
一五〇〇	父 山下 弥吉
一五〇〇	妻 工藤 ハナ
五〇〇〇	姉 伝福 ちゑ
妻 雲石 ハツ	

五〇〇〇	母 田中 ロク
一五〇〇	兄 今野 孝
五〇〇〇	父 熊谷 克己
五〇〇〇	母 佐藤 ヒトシ
五〇〇〇	父 白沢 太郎
五〇〇〇	父 鈴木 秀二郎
五〇〇〇	妻 渡辺 雪子
三〇〇〇	妻 松木 孝子
一〇〇〇	妻 島山 タカ
一〇〇〇	妻 小室 舜司郎
一〇〇〇	妻 奥山 キノ
一〇〇〇	妻 小前 ミヤ
一〇〇〇	母 佐々木 三郎
一〇〇〇	母 時田 セキ
一〇〇〇	妻 大島 久次
一〇〇〇	妻 丹野 アサ
一〇〇〇	妻 吉田 ハル
一〇〇〇	父 馬場 信吉
一〇〇〇	父 角田 直吉
一〇〇〇	兄 八木 沼与三
三〇〇〇	兄 阿部 文吾
三〇〇〇	父 安沢 隆平

一〇〇〇	青木 謹次
五〇〇〇	大塩 ヒサ
五〇〇〇	鮫島 みさを
五〇〇〇	小出 チヨ
四〇〇〇	小林 セキ
三〇〇〇	高橋 タツ
二五〇〇	深谷 偵治
二〇〇〇	黒岩 ヨシ
二〇〇〇	母 飛田 晴夫
二〇〇〇	妻 若狭 あさ子
一〇〇〇	兄 島田 源治
一〇〇〇	父 榎井 定一
一〇〇〇	父 岡島 雄男
一〇〇〇	父 富田 勝次
一〇〇〇	姉 沢村 キヨ子
一〇〇〇	妻 栗原 タネ
一〇〇〇	兄 岡村 藤重
一〇〇〇	母 新井 ハマノ
一〇〇〇	兄 小暮 長一
一〇〇〇	長男 榎井 一正
一〇〇〇	星野 千恵子
一〇〇〇	妹 木村 正子
一〇〇〇	姉 加瀬 よし
一〇〇〇	姉 加瀬 よし
一〇〇〇	妻 桑田 忠蔵
一〇〇〇	妻 佐野 和子
一〇〇〇	妻 広原 利一
一〇〇〇	父 藤崎 チヨ
一〇〇〇	父 腕木 好太郎
一〇〇〇	父 三橋 長吉
一〇〇〇	母 加藤 キクヤ
一〇〇〇	母 木村 ちよ
一〇〇〇	妻 小泉 文江
一〇〇〇	妻 佐竹 エス
一〇〇〇	父 林 茂清

五〇〇〇	水野 はな
五〇〇〇	小泉 文江
五〇〇〇	加藤 普佐次郎
五〇〇〇	浮田 信家
四〇〇〇	黒川 清一郎
三〇〇〇	三ツ木 正次
二五〇〇	田中 ハナ
二〇〇〇	井上 正四郎
二〇〇〇	井上 正三郎
二〇〇〇	国松 ふみ江
二〇〇〇	林 鉄五郎
二〇〇〇	屋間 楽平
二〇〇〇	藤崎 雅彦
二〇〇〇	母 増山 キミ
二〇〇〇	父 和正 正江
一五〇〇	父 森田 富平
一五〇〇	父 宇田川 ヒサ
一五〇〇	父 宇田川 ヒサ
一五〇〇	父 小泉 タケ
一〇〇〇	母 吉田 いそ
一〇〇〇	母 田中 テル
一〇〇〇	母 織江 モモ江
一〇〇〇	母 岡本 リヨ
一〇〇〇	母 岡本 リヨ
一〇〇〇	母 小畑 サト子
一〇〇〇	父 川生 馨
一〇〇〇	妻 熊木 ちよ
一〇〇〇	妻 栗原 利雄
一〇〇〇	妻 小長谷 ひさ
一〇〇〇	妻 斎藤 ハナ
一〇〇〇	妻 椎橋 正利
一〇〇〇	妻 鈴木 つな子
一〇〇〇	妻 菅原 妙照
一〇〇〇	妻 高橋 作次郎
一〇〇〇	父 内海 静枝
一〇〇〇	父 田中 福三郎
一〇〇〇	父 山中 健征
一〇〇〇	父 黒田 義雄
一〇〇〇	兄 飯島 浩一
一〇〇〇	兄 稲垣 健

一〇〇〇	長男 井上 賀雄
一〇〇〇	妻 萩島 佐吉
一〇〇〇	兄 春田 清子
一〇〇〇	兄 久保田 正義
一〇〇〇	父 手塚 いそ
一〇〇〇	父 徳田 順一
一〇〇〇	父 中井 福三郎
一〇〇〇	父 長尾 ふさ
一〇〇〇	兄 松井 直一
一〇〇〇	妻 山村 エツ子
一〇〇〇	母 伊藤 義
一〇〇〇	弟 岡野 正文
一〇〇〇	母 深野 ヒサ
一〇〇〇	妻 高木 スズエ
一〇〇〇	妻 中村 サダ
一〇〇〇	妻 高木 スズエ
一〇〇〇	妻 平松 菊江
一〇〇〇	妹 志沢 なお
一〇〇〇	兄 大槻 惣一郎
一〇〇〇	兄 大槻 惣一郎
一〇〇〇	兄 沖立 キヨ
一〇〇〇	妻 木俣 ミサヲ
一〇〇〇	妻 栗城 綱吉
一〇〇〇	妻 田沢 廉子
一〇〇〇	妻 津久井 艶子
一〇〇〇	妻 伊沢 ヤス
一〇〇〇	妻 清水 春江
一〇〇〇	妻 高野 金四郎
一〇〇〇	妻 露木 栄子
一〇〇〇	妻 津久井 艶子
一〇〇〇	妻 落合 てふ
一〇〇〇	父 黒川 孝平
一〇〇〇	父 志田 平八郎
一〇〇〇	姉 小林 富貴子
一〇〇〇	妻 平林 さん
一〇〇〇	父 橋爪 助二郎
一〇〇〇	父 飯田 万吉

事務局だより

○嘉村栄氏を新に篤志会員に委嘱

嘉村氏は元海軍大佐、戦争中は航空隊司令とし、各戦線に従軍され何回か死線を超えて、数多くの殊勲の功績を挙げられた方であります。特にナウル、オーシャン、ギルバート諸島、マーシャル諸島には御関係深く従来も格別の御指導をいただきました。今後篤志会員として一層の御手伝いをお願いいたしましたところ御快諾を得ましたので昭和四十二年八月みだしのとおりに御委嘱申上げることとなりました。御住所は山口市仁保上郷であります。

○年度会費御送金のご案内

環礁八号に定期総会の記事を載せ、今後本会の運営は会員からの会費による事になったと御知らせしました。創立以来はじめて会費制になったことと、たまたま靖国神社創立百年奉祝の奉賛費と一緒にしたためまぎらわしなかったかも知れませんが、事務局としても本会の年度会費と靖国神社の奉賛費の振替用紙を二枚も入れては、皆様御不快と思われ本会の分はお送りしませんでした。四十三年度会費の集り悪く、この儘だと四十四年度以降の運営が心配になります。本会は基金に余裕がありませんので四十四年度の会費は、四十三年中にお納めいただきます。計画が出来ないいただきます。既に四十四年度分まで御納め下さった方は、勿論会費御送金の必要はありませんが、四十三年度分を既納の方はなるべく早く四十四

年度分を、四十三年度分も未送付の方は四十三、四十四年度二ヶ年分をなるべく早く御送り下さいますようお願いいたします。

○御送金の取扱いについて

会費制となるまでは総ての御送金(写真その他物品代価、宿泊料等は除く)を寄附金として扱い、寄附者芳名を環礁に掲載して御礼を申し上げておりました。今後は会費の五百円は環礁に掲載せず、五百円を超える部分は従来通り、芳名と寄附金額を寄附者芳名欄に載せて、感謝申し上げますに改められました。ついでながら、前号でもお願いしましたとおり、物価上昇の折納会員すべての方が規定の会費五〇〇円では運営困難でありますので、有志の方の御寄附御協力を重ねてお願いいたします。

○除幕・清祓祭の際納入の年度会費の取扱いについて

八月十七日迎賓館で行われた祭典の際一柱の戦死者に対し、二人以上の遺族の方で年度会費を納めた例があります。年度会費は戦死者一柱につき年額五百円いたたくことになっておりますので、当日二人以上御納めの方は、お一人分は四十四年度の会費として処理いたしましたことを御承知下さい。○靖国神社創立百年奉祝大祭に對する御協力について

みだしのことは、奉祝奉賛会からの御依頼によって、環礁八号にその要旨をお伝へし、御協力をお願いいたします。会員中には、個人として或は地区遺族会等の御関係に既に奉賛金御送付の方がおられると思いましたが、御送りした振替用紙で奉賛会に御送金下さった方が

八月三十一日現在二七〇人、金額三十五万三千六百円に達したと先日電話で通知され、大変感謝されました。振替用紙通信欄の右下に「わ」という印判を押してありましたが、その「わ」が本会の符号でそれによって整理されてある由です。お送りした用紙を紛失されたりして適宜の用紙でお送金なされた方でお知らせ下さいましたら年月日等お知らせ下さいましたら奉賛会にお願いして、御一緒に整理していただきます。

○在庫品について

- 一、写真
 - 1 昭和四十三年八月十七日迎賓館での碑の除幕式・清祓式
 - ①祭壇 ②清祓式 ③朝香名譽會長挨拶 ④碑の正面 ⑤同裏面
 - ⑥参加全員の記念写真、白黒内④はカラー⑥はキャビネ版以上六枚一組二五〇円
 - なお一枚宛でもおわけします
 - ①④⑤の原版はカラー②③⑥の原版は白黒です。別項の代価御参考の上御申込下さい。
 - 2 クェゼリンにおける慰霊碑この写真は十二月二十日前後本部に到着の予定です。環礁十号(四十四年七月発行)には掲載しますが早く御覧になりたい方は別記代価御参考の上御申込み下さい。
- 3 焼増代価

カラ	キャビネ	サイズ	サービズ
1	三〇〇円	手札	六〇円
白黒	五〇円	サイザ	二〇円

二・其の他
各島の靈砂・環礁各号・振替用

新春を寿ぎ

謹んで新年の

お慶びを申し上げます

昭和四十四年元旦

◎ 本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	監事	末広 正男
顧問	石橋 湛山	篤志会員	有馬 成甫
相談役	朝香 孚彦	篤志会員	板垣 徹
会長	林 茂清	篤志会員	大野 克一
副会長	村上 義一	篤志会員	嘉村 栄
常任幹事	浮田 信家	篤志会員	瀬沼 光久
常任幹事	佐藤 宗丞	篤志会員	土屋 太郎
常任幹事	昼間 楽平	篤志会員	中島 昌彦
常任幹事	秋山 正清	篤志会員	中田 虎一
幹事	井上 賀雄	篤志会員	成田喜代治
幹事	宇田川ヒサ	篤志会員	長谷川栄次
幹事	木村 久子	篤志会員	長谷川 敏
幹事	国松ふみ江	篤志会員	林 幸市
幹事	小泉 文江	篤志会員	松平 永芳
幹事	佐竹 エス	篤志会員	村岡 達志
幹事	萩原金次郎	篤志会員	安藤 小夜
幹事	山浦 信子	篤志会員	白鳥 梯子
幹事	岡野 正文	篤志会員	本木 光江
監事	岡野 昭利		
監事	橋口 昭利		

紙・従来の各種写真(全部原版を保管中)保存してあります。御入用の方は御用命下さい。

○編集をおわって

現地の記事を載せずして、遺作遺影も皆様からのお便りも、載せられませんでした。編集人の不手際をお詫びします。編集につきお気付の点お示し願いたいと思っております。

本部

郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マール方面遺族会
電話(東京)三三六四番